

in touch with your daily life

KISSARAKU JUKU



tea
AtoZ

お茶のある風景
絆、和、彩、そして未来



KISSARAKUJUKU
access
quality
life



お茶を飲むこと。そのシチュエーションは様々で、
今では私たちの暮らしのアクセントになっています。
『お茶をいれる』ことは、幾つかの手間が必要とされます。
その手間こそが文化であり、
お茶本来の良さをもう一度再認識したいですね。

お茶ってなんだろう。



絆

一杯のお茶



昔から日本では、夕食の後も家族が集い、語り合う『団欒』という時間を持っていました。子供達はその日あった楽しかったこと、

困ったことを家族に話し、家族はその話に真剣に耳を傾け『絆』を一層深めてきたのです。

そしてその傍らにはいつも『一杯のお茶』がありました。

ある時はとても渋く、またある時は極上の果汁のように爽やかで甘かった。

『一杯のお茶』には、その家の『絆』がしっかりと結ばれていました。

心が迷走を続ける現代日本。

薄っぺらい清涼飲料水でお茶を濁すような背中あわせの家族関係を見直し、

家族の『絆』復活が求められる現代社会には、

家族が集い語らう『団欒』と心がこもった『お茶』が、

これからのキーワードになっていくのではないのでしょうか。

私たちの生活の中で今も生き続ける
お茶のある風景
——「絆」「和」「彩」「未来」——

今も多くの人たちは、

いつものお店で買い求めてきたお茶をいつもの急須に入れ、

ポットのお湯を注いで食事やおやつの時に何気なく飲んでいます。

それはまさに生まれた頃からの『食習慣』であり、

大切なことではありますが趣味・嗜好の世界からは大きくかけ離れてしまっています。

紅茶やコーヒーを前にすると少しでも美味しく入れようと身構えたりしますが、

何故かお茶の時には、すっかり『文化』が『習慣』にすり変わってしまっているのです。

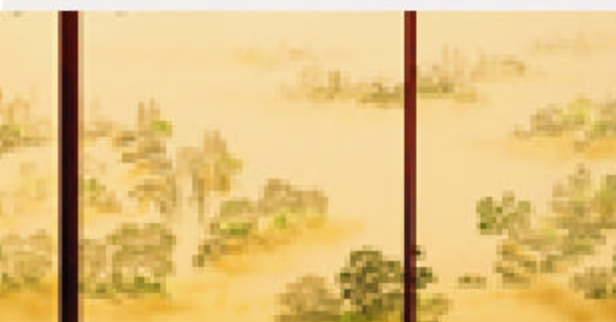
先人達が研究・改良を続け生み出してきたお茶の本当の美味しさと、更にそれを高めていくため

のお茶のゆとりある演出が『文化』としてのお茶にはあることに気付いてほしい。

より私たち現代日本の食文化を豊かにしていくためにも

お茶の本当の良さを再認識し更に『創造』することで

もっともっとお茶を魅力的で『彩り』あるものにしていきたい。



和

日本人の誰もが、幼児の頃から口にしてそれぞれの
家庭の思い出がしみ込んだ飲み物お茶。
気負うことなく、臆することなく、
そこにはそれぞれの思いの中に等身大のお茶があります。
しかし多様化する日本人のライフスタイルは、
紅茶やコーヒーなど異種文化の中にも新たな発展性を
見い出しているのも事実です。
けれども、和菓子にはお茶が似合うし、
畳の上には緑色のお茶がやっぱり似合うのです。
その感性が分かるのもやはり私達が
『和の国の住人』だからではないでしょうか。

和の国の住人



そして21世紀、お茶の未来は
これまでと同じ、食文化の中での飲料としてのお茶には、
急激な消費拡大は望めないのかも知れませんが
しかし『健康』というキーワードを得て、世界レベルで
注目されはじめたお茶やお茶関連商品の市場規模は
四千億円以上と言われ、
そこには大いなる可能性が秘められています。
既にヨーロッパ等への輸出も年々増加、徐々にではありますが
お茶の愛好国も増えてきています。
世界の人々が手頃な選択肢の一つとしてお茶を
楽しむ日も21世紀には迎えられるのではないのでしょうか。



文化と創造

彩



Japanism

悠久の時間が織りなす遥かな記憶と お茶のある風景

世界に続く Tea Road の旅

ルーツ

前漢末期頃に中国南部に住む非漢民族の間で飲まれていたお茶が、以後漢文化のなかに取り入れられ、

その形式も整備されていきました。やがて、近隣の朝鮮、日本、蒙古、チベットへとお茶は普及、

その後これら諸国を中継点としてお茶は全世界に波及していきます。

今見る茶にはその面影を見ることもできませんが、お茶の源流はたしかにこのあたりにありました。

本質的には変化していないお茶も、それぞれの国に入ってその国の風俗習慣に吸収され、変化・適応して

その国独自のお茶になっていったのです。

日本のように茶道に代表される心の内面に向かう精神文化になって根付いていった国、

モンゴルやチベットのように生活必需品として根付いていった国、

イギリスのような経済発展を志向する物質文化としてお茶をとらえてきた国などさまざまです。

お茶は地球上の民族が、風俗、習慣、言語において違うのと同じように、お茶そのものは変わらなくても

その国なりの進化・共存を遂げてきました。

文化

今では当然のことですが、いつでも、どこでも、誰でも飲めるのがお茶です。

紅茶、中国茶を組み合わせれば

その範囲はますます広がりどんな食文化にも対応でき、

それに応じた楽しみ方や演出は、現在も発展を続けています。

国や衣食住の変化に応じて、楽しむことができるのは、

お茶を飲んで他にはないのではないのでしょうか。

確信を持って言えるのはお茶の利権をめぐる争いはあっても

「お茶を飲みながら喧嘩をする者はいない」ということです。

これはまさにお茶の持つ高徳の現れであり

お茶はその国の食文化を反映しているモノで勿論優劣をつけられるモノではありません。

お茶はまさに人類の食文化なのです。

